

江戸時代における詠物詩の比較研究（要約）

文学研究科博士課程後期
人間文化学 比較日本文化学
D135041 任 穎

1 研究背景と研究目的

日本最古の漢詩集『懷風藻』の中には、すでに物を詠う漢詩が現れていた。平安初期の勅撰三詩集『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』では、『文華秀麗集』に嵯峨天皇の梅花を中心に詠った「梅花落」があり、『経国集』では高田使の梅について詠んだ「奉和殿前梅花」のような物（梅）を主題とする作品が現れた。

五山文学の僧侶たちの詠物詩は主に中国の詠物詩の影響を受けたもので、平安時代よりも作品数は多くなる。主に植物について詠ったもので、動物などについてのものは極めて少ない。江戸時代になると、社会が安定して人々の生活も比較的豊かになり、都市文化の発展とともに、知識人の交際が頻繁になってくる。また、江戸前期頃には中国から詠物詩選が多く伝えられ、『詠物詩』や『詠物新題詩選』『佩文齋詠物詩選』『歴代詠物詩選』などが翻刻され、漢詩人たちの詠物詩の手本ともなっていた。そのため、詠物詩の数は非常に多くなり、表現も豊かになっている。それらの詠物詩を収集し、『日本詠物詩』という詩集も安永 6(1777)年の春に刊行された。所収の詠物詩は江戸前期から中期までの545首である。

江戸前期から中期にかけて、個人の詠物詩集として松村梅岡の『梅岡詠物詩』と太田玩鷗の『玩鷗先生詠物詩百首』『玩鷗先生詠物雜体百首』などが見られる。また、詩人たちの各自の詩集にも詠物詩が多く収められている。江戸初期の林羅山が詠んだ詠物詩の数は多く、内容においても豊かな題材を取り入れている。また、彼は五山の僧侶の詠物詩の伝統を受け継ぎながら、自分なりの時代感を詩において表現しようという努力が見られる。羅山が可能な限り、多彩な題材を詠う性格と異なって、丈山の詠物詩は桜の詩と牡丹の詩が多く見られる。彼らの詠桜詩について、羅山の詠桜詩にはよく「花」や「櫻花」という詩題が見られるが、丈山の詠桜詩には「拍毬櫻」「絲櫻」「彼岸櫻」なども詩題に見られる。

また、伊藤仁斎の詠物詩では、彼の詠梅詩には家族や友人との梅の花見を詠

う作品が見られる。仁斎の詠桜詩においては、当時江戸前期の花見の名所を尋ねて詠う作品が何首か見られ、桜の名所を巡る花見は文人の趣味の一つとなることが窺える。また、新井白石の牡丹詩を考察すると、当時丈山のような盛唐詩の典拠や表現を踏まえて牡丹を詠じるのは流行りだが、白石はその流行りに少し変化を加えようという姿勢が見られる。

江戸後期では、詠物詩はかなり広く流行しており、前期や中期より多くの個人的な詠物詩選が刊行された。また、この時期の漢詩人たちの詩集の中には詠物詩が多く詠まれていたことがわかる。例えば、市河寛斎の『寛斎摘草』と『寛斎先生遺稿』の中には、約 120 首の詠物詩が詠まれている。特に、『寛斎先生遺稿』巻三の中には身近な文房四宝など器物を詠う 50 首の詠物詩が収められている。また、大窪詩仏の詠物詩（約 180 首）では、蝶・竹・梅・桜など豊富な詩題を用いて、『詩聖堂詩集』初編から二編にかけて、連作の詠物詩を詠んだような例は多く見られる。さらに、柏木如亭には『詩本草』という詠物詩集がある。このように、江戸後期の詩人たちの詩集を探ってみると、特に新しい清新性霊の詩風に影響された詩人たちが、多くの詠物詩を詠んだことがわかる。

これまでの江戸期の詠物詩に関する先行研究については、揖斐高『江戸詩歌論』（汲古書院、1998 年）で、『日本詠物詩』に言及されている以外、専論は見られない。また、こうした詠物詩に対しての注釈書なども未見である。江戸後期の詠物詩について、例えば菅茶山の詠物詩に関する研究には、ある特定のモチーフを選択し検討した朱秋而氏「菅茶山の秋蛩詩——『鈴虫』との関わりをめぐって」（『国語国文』第 72 号、京都大学国文学会、2003 年）がある。朱氏は、一つの詩語「鈴虫」（秋に鳴く虫）を手がかりとして、茶山の独特の美意識を検討している。また、小財陽平氏は「茶山詩風の転換」（『近世文芸 研究と評論』第 69 号、日本近世文学会、2005 年）において、茶山の詠蘭詩を陸遊の詠蘭詩と比較して研究しており、「茶山詠石詩試解」（『近世文芸 研究と評論』第 68 号、2005 年）では、『黄葉夕陽村舎詩集』中の詠石詩における茶山の「独自性」を検討している。しかし、これらの研究はあるモチーフをテーマとし、具体的な表現を検討することを中心とするものである。そして、菅茶山の詠物詩における中国の詠物詩との影響関係や同時代の詩人との比較研究などの視点から見れば、未だ十分とは言えない。また、江戸前期から江戸後期にかけて、詠物詩が時代の詩風とともに、変化していた傾向もこれらの研究から見出すことはできない。

2 研究対象と研究方法

本研究では、まず日本漢詩における詠物詩の歴史を考察する。日本最古の漢詩集『懷風藻』の中には、漢詩 120 篇が収められている。『懷風藻』の中には詠物詩と思われる 8 首の作品が見られる。『懷風藻』の詠物詩では、どのように「物」が詠まれたのか。また、それらの作品は後代の詠物詩において、どのような影響を与えたのか。日本漢詩における詠物詩を考察する際、それらの詩はどのような位置付けがなされているのかについて検討した。『懷風藻』の中で詠物詩と思われる 8 首の作品を例として分析し、以上のような点について論述する。

また、平安初期に嵯峨天皇の勅命によって弘仁 5 (814) 年に編纂された漢詩集『凌雲集』の詠物詩を取り上げる。それらの作品は一体どのような特徴を持っているのか。また、『懷風藻』と比較して、詠物の題材や詠物詩の数などの面において、どのように発展したのかについて具体的な例をあげながら検討した。

次に、『文華秀麗集』は、弘仁 9 (818) 年に嵯峨天皇 (786-842) の勅命によって編集された。『文華秀麗集』には遊覧・宴集・餞別・贈答・詠史・述懷・艶情・樂府・梵門・哀傷・雜詠という部立がある。詠物詩と思われる作品は「樂府」・「雜詠」部に見られる。「樂府」部に 4 首、「雜詠」部には 48 首、合わせて 52 首の詠物詩が収められている。「樂府」部に収める嵯峨天皇の「梅花落」と菅原道眞の「奉和梅花落」は初めて梅を主題として詠う詩である。『懷風藻』や『凌雲集』と比較して、これらの作品にはどのような特徴があるのか。また、『文華秀麗集』ではいかに新たな詠物詩の題材が現れているのかについて、「樂府」部と「雜詠」部の詩を読解しながら考察した。

さらに、淳和天皇の勅命によって天長 4 (827) 年に編まれた『経国集』に見られる詠物詩に目を向ける。『経国集』の「樂府」部に 6 首、「雜詠」部に 157 首、合わせて 163 首詠物詩が見られる。『経国集』に見られる詠物詩を取り上げ、それらの詩にはどのような特徴が潜んでいるのか。また、『懷風藻』、『凌雲集』、『文華秀麗集』の詠物詩の表現と比較すると、どのような発展を遂げているのかについて検討した。

最後に、鎌倉時代の詠物詩を検討する。五山の僧侶は詠物詩を愛誦している。本研究ではその五山の僧侶の詩集を取り上げ、彼らの詠物詩と思われるものを整理した。また、それらの作品に見られる五山文学の詠物詩の特徴を探ってみた。さらに、五山文学の詩は後世の詠物詩にどのような影響を与えたのかにつ

いても考察を加えた。

江戸前期から中期にかけては、前代には見ることのない多くの詠物詩が詠まれている。まず、林羅山について、『林羅山詩集』にある詠物詩を研究対象にし、従来の研究に見られない江戸初期の詩人である林羅山の詠物に対しての認識を明らかにする。また、彼の詠物詩を挙げながら、五山の僧侶よりどういった面において発展が見られ、どのような特徴を持っているのかについて検討したい。さらに、今まで評価されていない彼の、江戸初期の詩壇における詩の創作活動の位相を、より精確に描き出した。

次に、石川丈山の詠物詩を検討した。丈山に関する先行研究を踏まえ、未だに見られていない丈山の詠物詩を取り上げ、そこから丈山が「日東之李杜」として評価される理由を探ってみた。また、丈山が近世初期の詩人として、彼の詠物詩において、どのような特徴が現れているのかについて考察した。

さらに、伊藤仁斎の詠物詩を取り上げた。仁斎の『古学先生詩集』の中では、詠物詩として見られる作品は全部で124首であり、そのうち詠花詩は44首が見られる。彼の詠花詩に焦点を当て、それらの作品はどのような特徴が潜んでいるのかについて考えた。

最後に、先行研究に見ることのできない新井白石の詠物詩について考察する。白石の『白石詩草』と『白石先生餘稿』の中に、詠物詩と思われる作品を研究対象とし、それらの詩の特徴を検討した。またそれらの作品は後世においてどのような影響を与えたのかについて論じる。また、『日本詠物詩』に収めている詠物詩を中心に、荻生徂徠・高野蘭亭・祇園南海・室鳩巢・梁田蛻巖らの作品を取り上げ、それぞれどのような傾向が見られるのかについて検討する。

江戸後期の詠物詩については、新しい清新性霊派の詩風の先駆者である六如上人と、同じく宋詩を手本とする日常的な詩情に富んだ平明な詩風を主張する菅茶山の詠物詩をはじめ、「江戸の四詩家」と呼ばれている大窪詩仏・市河寛斎・柏木如亭・菊池五山などの作品を取り上げた。

江戸後期の詠物詩について、例えば新しい宋詩風を積極的にとり入れた菅茶山の作品については、まず菅茶山の詠物詩に関する先行研究を検討し、その問題点を明らかにした上で、江戸後期詩人である菅茶山の「詠物詩」の概念を明確にしたい。詠物については、その対象ごとに分類し、それぞれの対象を描く詠物詩をまとめ、詩人ごとの詠物詩の特徴を探っていきたい。このような考察

によって、菅茶山の詠物詩の特徴が把握できると考える。

次には、新詩風を積極的に取り入れた大窪詩仏・市河寛齋・柏木如亭・菊池五山の詠物詩を考察したい。市河寛齋の『寛齋摘草』と『寛齋先生遺稿』には、寛齋の詠物詩が約120首収められている。そのうち器物を詠ったものは55首があり、『寛齋先生遺稿』巻三の中に収められている。それらを考察することによって、江戸後期の漢詩人がどのように身の回りの文房四宝を詠い、またそれらを贈り物として交流を行っていたのかということが明らかにできる。

また、大窪詩仏の詠物詩研究については、『詩聖堂詩集』（初編、二編、三編）の詠物詩を抽出し、詩題ごとにまとめる。江戸中後期にすでに日本にもたらされた中国の詠物詩選を参考とし、それぞれのテーマごとに分けて分析する。先行研究を踏まえて、詩仏自身が書いた付記を参考にしながら、詠物詩の内容を分析する。それに加えて他の同時代の詩人による詠物詩の評価にも目を向けたい。以上のような考察によって、詩仏の詠物詩はどのような点で中国の詠物詩から影響を受けたのかについて明らかになるとと思われる。

詩仏の詠物詩の中で、『詩聖堂詩集』初編の巻一の中に収められている特徴的な連作の詠蝶詩を例として取り上げ、それら10首の作品の内容や詩仏自身が書いたコメントから詩仏の詠蝶詩の特徴を探ってみた。これらの作品の中では、どのように中国の詠蝶詩を受容したのかについても考察する。さらに、江戸後期の漢詩人で、詩仏と交流があった菅茶山・頼山陽・市河寛齋・柏木如亭などの詠物詩に触れながら、江戸後期の詠物詩の中での詩仏の詠物詩の位置付けを考えてみた。江戸後期、詠物詩が流行している詩壇の中で、「江戸の四詩家」と呼ばれている大窪詩仏の詠物詩の中で、どのように詩仏の「清新性霊」が表現されているのかについても、詳しく考えてみた。

次に、柏木如亭の『詩本草』では、如亭が全国各地を遊歴した時に出会った珍味佳肴を詠い、そこには「蕎麦」「太刀魚」など有名な詠物の作品も収められている。『詩本草』四十八段の中で、最も詠まれたのは「魚」である。「大刀魚」「鯛」「鯉」「鱸魚」などの作品があり、「余の性、魚を好む」という表現も『詩本草』の中で見られる。本研究では、柏木如亭が詠んだ詠魚詩を例としてとりあげ、また漢詩に関する如亭自身が書いた散文などにも注目し、柏木如亭の詠魚詩の特徴を探る。

最後に、ほかの詩人たち、西山拙齋・頼春水・柴野栗山・葛子琴・菊池五山

らの詠物詩を取り上げ、深く読解していくことにより、彼らの詠物詩はどのような特徴を持っているのかを明らかにした。

3 本研究の構成

本研究は全6章で構成されている。

第1章では、研究の背景や研究の目的、先行研究などを説明する。また、研究対象や研究方法についても論じる。

第2章では、日本漢詩における詠物詩の歴史を探究した。最古の漢詩集『懷風藻』から平安初期の勅撰三詩集『凌雲集』・『文華秀麗集』・『経国集』の詠物詩と思われる作品を考察した。また、鎌倉時代の五山文学における詠物詩の特徴もこの章において検討した。

第3章では、江戸前期から江戸中期にかけての詩人たちの詠物詩を取り上げた。まずは林羅山や石川丈山、次に伊藤仁斎や新井白石の詠物詩について論じる。さらに、『日本詠物詩』という江戸中期に出版されている詠物詩のアンソロジーを中心に、同時代ほかの詩人の作品にも目を向けた。

第4章では、江戸後期の詩人たちの詠物詩を検討した。まずは宋詩の新風を先駆けとして受容している六如上人の詩を考察した。次に、彼の友人であり、同じく宋詩を学んでいる菅茶山の詠物詩を取り上げた。さらに、江湖詩社の市川寛斎・大窪詩仏・柏木如亭・菊池五山の詩について具体的な例を挙げながら、それらの特徴を探究した。最後に、そのほかの江戸後期の詩人の作品を論じる。

第5章では、江戸前期から江戸後期にかけて、詠物詩が時代の詩風とともに、変化していった傾向を分析した。

第6章では、以上の考察を踏まえて、本研究の結論を出した。

4 結論

本研究においては、まず日本漢詩における詠物詩の歴史を考察した。日本最古の漢詩集『懷風藻』の中には、漢詩120篇が収められている。『懷風藻』の中には詠物詩と思われる8首の作品が見られ、『懷風藻』時代の詩人はすでに「物」の自然特徴・特性と物に潜んでる気質を分けて詠んでいる傾向が見られる。文武天皇の「詠月」には豊かな表現技巧が見られ、「詠雪」に雪を「柳絮」に喩える表現は、後代の詠雪詩に影響を与えている。しかし、『懷風藻』に見られる詠物詩の多くは、六朝時代や初唐の典拠を踏まえて詠っていることがわかる。この時期の詠物詩はまだ中国の詠物詩の模倣学習としか言えない。しかし、それ

らの詩人たちの努力によって、後世の『凌雲集』・『文華秀麗集』・『経国集』に至って、詠物詩はより豊かになっていく。

また、嵯峨天皇の勅命によって弘仁5(814)年に編纂された漢詩集『凌雲集』では花が初めて詩の主題として詠まれている。平城天皇の「詠桃花」と「賦櫻花」は日本漢詩の詠花詩の歴史における、最初の作品とも言える。また、『凌雲集』に見られる3首の詠雪詩は初めて「梅柳」を合わせて詠っていたことが窺える。さらに、『懐風藻』に見られない笙の音を詠った詩も『凌雲集』に3首見られる。『凌雲集』の詠物詩は前代の『懐風藻』と比べると、数や題材においての発展を遂げているほか、作詩技術にも一定の向上が見られる。

『文華秀麗集』は弘仁9(818)年に嵯峨天皇(786-842)の勅命によって編集された。詠物詩と思われる作品は「楽府」部に4首、「雑詠」部には48首、合わせて52首の詠物詩が収められている。嵯峨天皇の「梅花落」と菅原道眞の「奉和梅花落」は初めて梅を主題として詠う詩として「楽府」部に収めてある。また、「雑詠」部の48首の作品の中に、動物を主題とした詩がこの時期に出現した。『懐風藻』や『凌雲集』と比較すると、動物自身に視点を置いて詠じていることが特徴的とも言える。

次に、淳和天皇の勅命によって天長4(827)年に編まれた『経国集』は賦類・楽府・雑詠・対策の四つの部分ある。「楽府」部に6首、「雑詠」部に157首、合わせて163首詠物詩が見られる。詠梅詩について考察すると、『文華秀麗集』の「楽府」部に見られる「梅花落」は梅花を中心に描かれている詩であるが、『経国集』に至ると、「雑詠」部の卷十一に8首の詠梅詩が見られる。また、詠桜詩について、『懐風藻』には見られないが、『凌雲集』にある平城天皇の「賦櫻花」がその初めと考えられる。『文華秀麗集』には桜についての詩は収めていないが、『経国集』には賀陽豊年の「詠桜」が見られる。さらに、題材において嵯峨天皇の「雑言漁歌」は初めての魚に関する連作である。そのほかにも多彩な題材が詠まれていることがわかる。

次に、鎌倉時代の詠物詩を検討すると、五山の僧侶は詠物詩を愛誦しているとわかる。特に詠花詩において、梅が一番多く詠まれている。しかし、それらの作品は主に典拠を踏まえて創作していたため、物についての観察が不足しており、また格調を追求し過ぎている欠点が見られる。しかし、五山僧侶の詠物詩の量は前代と比べると、極めて多い。彼らの積極的な作詩活動によって、後

世には多くの参考を与えたのではないと考えられる。

江戸時代に入ると、社会が安定して、人々の生活も比較的豊かになる。経済や文化の発展とともに、知識人の交際が頻繁になってくる。この時期には、中国から詠物詩選が多く伝えられ、漢詩人たちの詠物詩の手本ともなっていた。五山の詠物詩より、江戸時代に詠まれた詠物詩の量はかなり多い。

江戸前期から中期にかけて、詠物詩集を考察すると、詠物詩を収集したアンソロジー『日本詠物詩』という詩集の出現を見出せる。『日本詠物詩』は、伊藤栄吉が江戸時代慶長・元和以来の詠物詩を編纂した詩集である。安永 5(1776)年に完成し、翌年安永 6(1777)年の春に刊行された。個人の詠物詩集として松村梅岡の『梅岡詠物詩』と太田玩鷗の『玩鷗先生詠物詩百首』『玩鷗先生詠物雑体百首』などが見られる。

また、詩人たちの各自の詩集にも詠物詩が多く収められている。江戸初期の林羅山の詠物詩において、新しい革命を起こそうとする姿勢が感じられる。彼には五山文学の影響を受けながら、自分なりの時代感を詩において表現しようとする努力が見られる。羅山の友人である石川丈山の詠物詩は桜の詩と牡丹の詩が多く見られる。牡丹詩からは彼が盛唐詩の影響を受けていることを確認できる。詠桜詩について、羅山の詠桜詩にはよく「花」や「櫻花」という詩題が見られるが、丈山の詠桜詩には「拍毬櫻」「絲櫻」「彼岸櫻」なども詩題に見られる。

伊藤仁斎の詠物詩では、彼の詠梅詩には家族や友人との梅の花見を詠う作品が見られる。仁斎の詠桜詩においては、当時江戸前期の花見の名所を尋ねて詠う作品が何首かが見られ、桜の名所を巡る花見は文人の趣味の一つであったことが窺える。また、新井白石の牡丹詩を考察すると、当時丈山のような盛唐詩の典拠や表現を踏まえて牡丹を詠じるのが流行していたが、白石にはその流行りに少し変化を加えようという姿勢が見られる。さらに、白石の親友である祇園南海の詠梅詩においても宋代の蘇軾の詠梅表現の影響を受けていることから、江戸中期からすでに宋詩の影響が見られるのではないかと推測できる。しかし、本格的に宋詩を受容する姿勢を見せるのは六如上人である。

江戸中期から後期の詩壇において、六如に至って、ついに宋詩を学ぶ時代を迎えた。六如は従来の盛唐詩を手本として模倣し、中国的な伝統を重視している詩を詠うのに対して、積極的に日常生活から詩材を探し、日本的な表現を

詩中に取り入れることを主張していた。彼の詠物詩をみると、典拠を踏まえながら、次々に新しい発想を生み出そうとしている。彼の「花神」の表現は宋詩から影響を受けていると考えられる。六如とともに宋詩風を広めている菅茶山も彼の「十詠物」の序文において、当時の詩人たちの詠物詩の作り方を批判している。茶山は詠物詩について、忠実に姿を描写していくことを主張していた。また、茶山は宋詩や明詩の影響を受けながらも、日本的な表現を詩の中に取り入れている。

市川寛齋は関西において江湖社を起し、宋詩を集団的に学ぼうとしていた。寛齋の詠物詩をみると、彼の『寛齋遺稿』巻三に「傲具詩」という題名の下に、50首の詩が収められている。寛齋は日々愛用している筆や硯に目を向け、それらの物としての本質を把握しつつ、さらに新鮮な表現を取り込み、器具に新たな命を吹き込んでいる。数多く身の回りにある器具を詠い、また自分の詩集の一卷に収めたのは寛齋以前の詩人に見られない。

次に、寛齋の門人である江湖詩社の大窪詩佛は性霊説の主張者や宋詩の鼓吹者などと評価されているのは周知である。しかし、詩佛の詠物詩において、宋詩の清新性霊を享受していると評価するより、彼が折衷的な享受態度を見せたと言える。詩佛は折衷的に盛唐詩と宋詩を受容し、また多くの漢籍における歴史や神話に関する記述も参照しつつ、さらに自分の想像を加えたものと考えられる。

また、柏木如亭の詠物詩は、江戸後期の詠物詩壇において変わった存在とも言えるものである。彼には各地の名産を漢詩で紹介した詩集『詩本草』が残されている。その中の半分以上は魚に関する記述や詩であり、今日の地方美食グルメとも言える。如亭の『詩本草』の中で、日本でよく食べられている魚類について詳しく紹介し、また詠魚詩も多く収めてある。如亭は魚の産地、形状や特徴などもそれらに含めており、宋詩風より日本的と言える表現が多く見られる。

最後は江湖詩社の菊池五山の詩を検討すると、五山の詠物詩は日常生活における細かい観察に基づいているとわかる。その日常に根ざした描写が、読者の共感を呼び、感動させるのである。五山は『五山堂詩話』が世に知られているが、彼の詠物詩についての研究は未見である。寛齋の門人である五山の詠物詩は詩佛や如亭より、宋詩の影響がより強く見られる。

以上、江戸後期の詩人たちの詠物詩を考察した結果、六如や茶山を先駆けと

した宋詩風の革命は、市川寛齋やその門人によってさらなる発展を見せている
と言える。また、その後にも中島棕隠・広瀬淡窓・広瀬旭荘らによって、詠物
詩はすでに江戸詩壇における一つの主流となっていたということが分かる。